

シンポジウム：持続可能性の視点から考えたジオツーリズム

日時：2018年12月15日 13:00-15:00

会場：山口大学秋吉台アカデミックセンター（美祢市立秋吉台科学博物館内）

〒754-0511 山口県美祢市秋芳町秋吉 1237-938

主催：山口大学秋吉台アカデミックセンター、山口大学経済学部

入場無料。どなたでもご覧いただけます。

全体趣旨：

当セッションでは、国内外におけるジオツーリズムに関する研究取り組み・実践事例を紹介し、ジオパーク活動の中でジオツーリズムの位置付けや地域の持続可能性につながる課題について、議論を提供する。

コーディネーター：チャクラバルティ・アビック（和歌山大学）

発表者および各発表の要旨：

各発表 20 分 質疑応答 5 分

以降、総合討論 15-20 分

(1) ジオツーリズムとは？ジオツーリズムの定義と実践における「ずれ」から「持続可能性」を問い質す

チャクラバルティ・アビック
和歌山大学国際観光学研究センター

ジオツーリズムは、地球惑星科学の最新の知見に基づいた観光として定義され、自然景観の復元や、非生物多様性の保護論につながるはずであるが、実際の活動のほとんどは、「ジオパーク」という経済性や観光開発を意識した取り組みの一部として行われているため、経済的効果や自然災害防止を意識した活動になっている事例が非常に多い。このままであると、ジオツーリズムはサステナブル・ツーリズムの理念から大きく外れ、自然環境へ新しいストレスを生み出す要因にもなりかねない。本発表ではこのような諸課題を踏まえ、先導的な国際研究の事例からジオツーリズムを分析しながら、当セッションの議論の課題について説明する。

(2) 日本のジオパークにおけるジオツーリズムの限界

目代邦康
日本ジオサービス株式会社

ジオパークでは、地質遺産の保護をはかり、持続可能な地域経済を確立させるため、ジオツーリズムの実践に取り組んでいる。日本では、その基本的な考え方は浸透しているものの、活動主体の多くの地方自治体は、ジオツーリズムの事業者

にはなり得ず、自立した経済活動としてジオツーリズムを成功させてはいないといえる。一方、従来から、エコツーリズムを行っていた事業者がジオパークからの情報提供や協力を受けて事業を発展させていった例はいくつかある。今後、日本各地のジオパークやその全国組織の日本ジオパークネットワークは、ジオツーリズムのあり方やそれを担う人材をどのように育てるのか、真剣に考えていく必要があるだろう。

(3) 山陰の地質特性とジオツーリズムの可能性

脇田浩二
山口大学創成科学研究科

山陰には古第三紀の山陰帯火成岩が分布している。新第三紀には日本海が形成され、アジア大陸から切り離された島弧が成立した。そのときの地殻変動で形成された火成岩・堆積岩が、山陰の地質を特徴付けている。第四紀における山陰は、日本列島の中では火山活動が非常に少ない地域である。山陰の地震は、山陰ひずみ集中帯と呼ばれる活断層集中域で主に発生している。これらの地質現象は、沈み込む海洋プレートの特性に強く依存している。ジオツアーを企画する際は、これらの地質特性を正しく理解し、表面的な楽しみだけではなく、異なる地域で同時に発生したイベントを関連づけながら、時間と空間の広がりを感じさせるものであって欲しい。

(4) 萩ジオパークにおけるジオツーリズムの取組み

白井孝明
萩ジオパーク構想推進協議会

萩ジオパークでは約 1 億年間にわたる火成活動が生み出した多様な火山性の地質に触れることができる。また、江戸～明治期を主とする歴史的な遺産も多く現存し、地質や地形と人間社会との関わりの歴史をたどることができるのも特徴である。萩ジオパーク構想推進協議会では、ジオツーリズムに関わる人材を育成し、「大地と人のつながり」をテーマにしたジオツアーや体験プログラムの造成に取り組んでいる。これらは、経済効果の創出という目的もあるが、人と地質・地形の関係性を題材とすることで、来訪者に地質遺産の保全の必要性を体験的に認識させることを重視している。萩ジオパークのジオツーリズムに対する考え方と実際の取組みを紹介する。

*当シンポジウムは山口大学経済学部主催の年次報告会「観光政策 Informix」と合同開催されます。詳細につきましては以下の連絡先にお問い合わせください。
山口大学経済学部 朝水 (masamizu[at]yamaguchi-u.ac.jp)